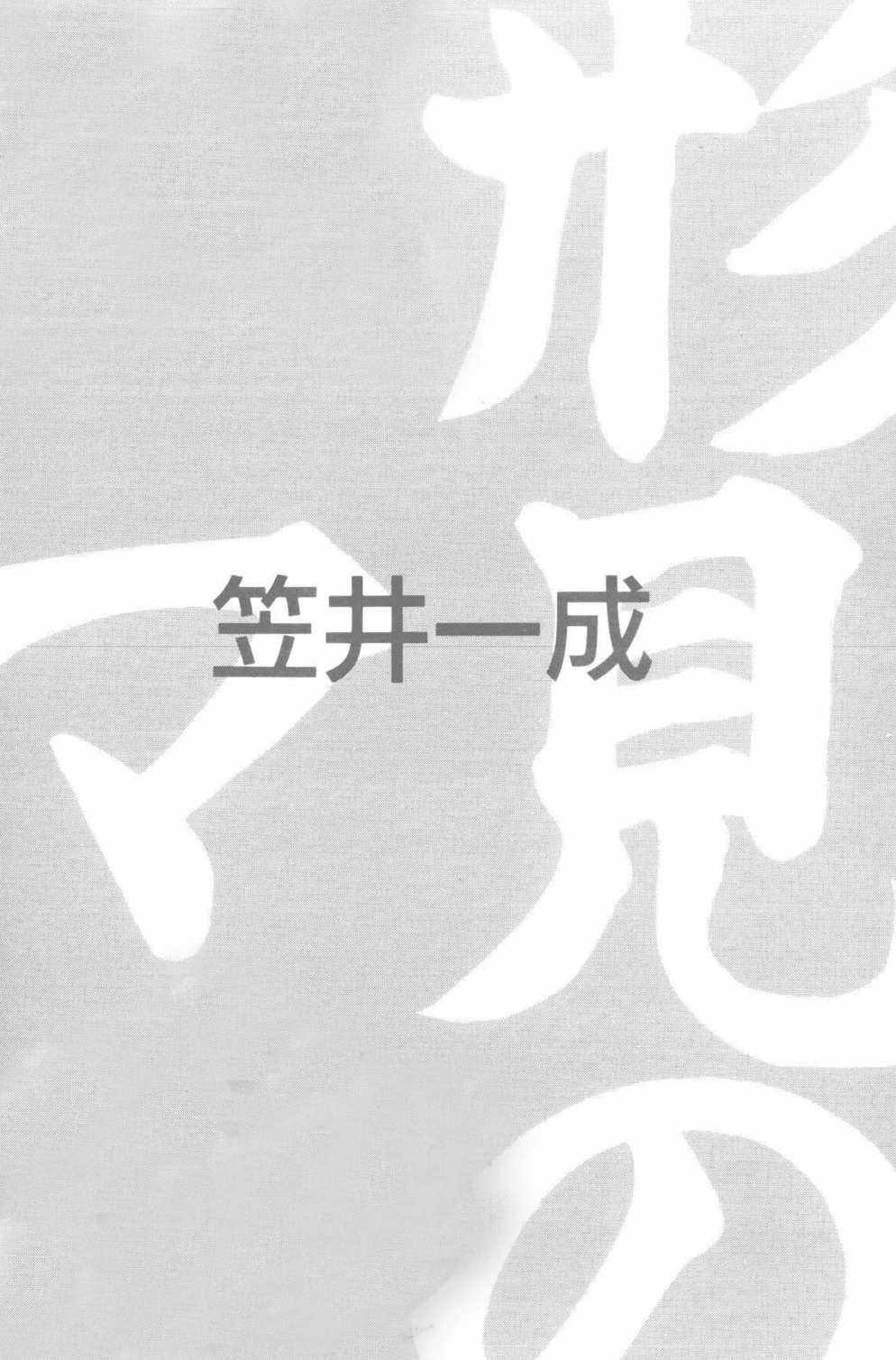


笠井一成

形見のハマチ



The background features large, stylized white Japanese characters on a grey textured background. The characters are partially visible and appear to be '新見' (Shinomi) and '成' (Nari), which together with the central text form the name 'Shinomiichi Narai'.

笠井一成

形 見 の ハ マ チ (かたみのはまち)

1995年2月1日 初版第1刷

著 者 笠井 一成 (かさい・いっせい)
発行者 福澤 英敏
発行所 藝 近代文藝社
〒112 東京都文京区日台2-13-2
(03)3942-0869 Fax (03)3943-1232
印 刷 信毎書籍印刷株式会社
製 本 渋谷文泉閣

© ISSEI KASAI 1995 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-7733-2959-9 C0093

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

形見のハマチ	5
不幸の天使	35
代用標本	91
犬死	137
慈愛なる悪意	161
植物園の怪人	171
言いわけの命	207
謝罪	225
希望	237
あとがき ● 青井克己	326

形見のハマチ

形見のハマチ

第一話 不能なわけ

となりで寝ている連れ子たちに勘づかれないように、オレは布団の中で妻のからだをまさぐっていた。

横向きになった妻を後ろからかき抱くと、さっきまで寝ていた妻はもうとくに目が覚めて何も言わずに息使いだけを荒げている。連れ子はふたりとも小学生だが、起きれば親が「変なことをしている」くらいは分るだろう。だから慎重に、激しい動作は今夜は禁物だ。

ふと、台所で電話をかけるジーッという音がしたようだった。気になるので耳を澄ます。うちは依然としてダイアル型の黒電話だ。

今度は、誰かがうがいをする音が同じ場所から聞こえてきた。誰も、というか何もいるはずがない。

妻も気づいたらしい。身体を半分起こして、無言で音のあたりを見つめている。

オレはゾッとした。ゾッとしたが、それをそのまま表わして妻を怖がらせると自分の恐怖もよけいに増すと思い、何も聞こえないふりで布団の中で震えていた。

妻も、黙って布団にもぐりこむ。オレの身体にしがみつくように。

そのうち、ギターの弦を一本だけはじくような音がした。オレは聞かないようにしようと布団に耳を押しつけた。

ああよかった、もう鳴らないなと思っていると、その瞬間を見計らったようにまた鳴り出す。オ

レはもう堪えられない。それで思い切って立ち上がり部屋の電気をつけた。

妻もよほど怖いのだろう。無言のまま立ち上がる。話しかけようとしたとき、彼女が暗い台所のほうをじっと見つめて硬直しているのにオレは気がついた。

連れ子たちも、もうとつくに起きている。ひとりは大きな口をボカンと開けて、同じ空間の一点を見つめていた。恐怖の原因がその方向にあるらしい。

だが、オレには分らない。見えないからよけいに怖い。ワキの下から冷たい汗が横腹に伝わった。

突然、ビュン！ ビュン！と、棒で空を切るような音が、一定の間隔を置いてこここで鳴った。それはオレにもはつきり聞こえた。

音が移動しているのだ。つまりこれは、何かの空間が動いていることと同義である。その度に、みんなのひきつった顔も下から左、上から右に動く。

そんなことを数秒間繰り返して遂に、音の位置が食卓のまじあたりで固定した。顔も止まる。何かがここへ出ようとしていることはもう間違いない。

そいつはとうとう現われてしまった。空間の裂け目から顔だけ出した老人だ。

老人はもつと出ようとものがく。たたこうと思って枕に手を伸ばすと、老人は凄惨な形相で睨みつけた。オレはすぐんだ。

他のみんなは何をしているか、不思議なことに目に入らない。ここにいるのは当然でも、その姿かたちはおぼろげだ。老人もそう感じているようで、オレばかり威嚇してすごんでいる。そうして、グロテスクにもがいている。オレの目は老人に釘づけだが、視野の隅に、小さな手鏡が入ってきた。

とうとう老人は全身こちら側に出てしまった。

それが、見たくもない汚いすっ裸だ。そして、年寄りらしくない素早さで、何とオレの唇に迫ってきた。

しかし、オレは一瞬早く行動をとった。手鏡で口を守ったのだ。キスをされるとは予想しない。ただ、無意識のうちに鏡をこいつに向けようとしたのは覚えてる。

老人は鏡に口をつけた。そして、直径十センチもない円形の中へ吸いこまれ始めた。

ところがだ、腰がひつかかって手間取った。老人は、自転車をごくみたいに脚をバタつかせる。そのときすぐ臭かった。オレは思わず顔をそむける。その瞬間、ふやけたペニスがダランと見えた。あとはジュルッという音と生ゴミめいた嫌な臭い。

あの音と臭いは、今も耳と鼻に残っている。それを思い出すにつけ、連想するのはなぜか男女の性器結合だ。

あれ以来のことだ、オレがインポになったのは。

第二話 ハマチの葬式

妻の連れ子たちも、もう中学生になった。男の子の年子で、ふたりとも学校では同じサッカー部の先輩後輩だ。

ある夜、近所の公園にサッカーをしに行こうと、兄が面倒臭がる弟をむりやり誘った。弟はしぶしぶ腰を上げたが、公園へ行く途中、車に撥ねられて死んでしまった。

台所のテーブルに、歯の矯正器具がある。弟が生前使っていたものだ。形見になったそれを手にとって、——こんなものをいつもはめていたのだな——と思う。思うと涙が出てきた。昨日の葬式までは、妻もいろいろ忙しくて泣くこともなかった。だが、今落ち着いてこんなものを見れば泣くに違いない。

矯正器具を見ながら、弟が「お兄ちゃんがサッカーに誘わなかったら……」と言って泣いている。それを聞いて、昨日まで頑固に涙ひとつ見せなかった兄も初めて泣いた。

死んだのは弟なのに、彼は自分の死に対して涙を流している。おかしいと、少しオレは疑った。それでオレは、昨日の葬式のことをよく思い出そうとした。

火葬場には人がたくさんいて、どれが誰だか分らない。覚えているのは、遺体を焼くあいだひまなので、すぐ近くの市場へ行って空色の大きな鳥を買ったことだ。

なんでもハマチという鳥で、この市場は持ち帰り用にその場で調理してくれるから、できあがるまでオレは火葬場の中をひとりで散歩した。

殺して食うのを動物に詫びて線香を立てている老人がいる。偽善的だとオレは思った。

調理が終わったところを見計らって戻ると、変わり果てたハマチが汚い新聞紙にはさまれている。それを持って家に帰ってきた。そこまで思い出せば、直後に新聞紙から転がり出てきた黒ごげのゴミが、今ここにある矯正器具のような気がしないでもない。となると、新聞紙で渡されたのは何の肉だったのか。

何も考えず食ってしまったので分らない。それでオレは調べることにした。

出かけようとすると、折り悪しく雨が降ってきた。それでも構わずずんずん歩いていくと、見覚えのある草むらの一角に、予想通り骨が散らばっていた。

近づくとも初夏の雨に濡れて臭い。手もちのバッグには洋服が入っている。骨をどう運んでも臭いがつきそうでいやだ。そこでオレは、さつき通った歩道にビニール袋が落ちていたのを思い出して拾いに引き返した。

あったあった。これに骨を入れればいい。オレはビニール袋を指でつまんだ。だがそれはビニール袋ではなく水たまりだった。ちよつと離れたところでアベックがオレを見て笑っている。

しかたがない。バッグ片手に、あいている手で骨を持って帰ろうと決心した。手は洗えないし、幸い雨は小降りになったから傘はいらない。

ところが、持ったとたん落としてしまった。ヌルヌルすべるからどうも持ちにくいと思っていたら案の定だ。拾い直そうとかがんだとき、オレはおや？と首をかしげた。

これはどう見ても鳥のガラだ。

これが鳥のガラだということは、オレはあるとき市場と火葬場を取り違えていたのかもしれない。

新聞紙で持ち帰ったのは、実は焼き上る途中の連れ子の遺体だったのだ。だから歯の矯正器具が転がり出たのも道理で、なのに間違えて食ってしまった。

しかし、この鳥のガラは何だ。それに、自分の形見を見て泣いていた人もいる。オレは誰を食ったのだろう。というより、いったい何が死んだのだ。

そこでオレは考えるのをやめた。とにかく、「ハマチ」はハナから死んでいたのだし、矯正器具という形見もちゃんと残っている。それに、オレが何を食ったって、食ってしまえば同じこと、それは大した問題ではない。

なんだ、心配することなかったとオレはホッとした。ホッとしたついでに鳥のガラを靴の踵で

思い切り踏みつぶした。クスクスいうのでふり返ると、さっきのアベックがまだ笑っている。別に気にせずに、オレは家に帰った。

戻ると葬式の真最中だった。オレは妻に怒られた。

第三話 食欲

飯を食おうと思ってファミリールレストランに入ってみると、外見は立派だし自動ドアだったのに中がずいぶん汚い。

どうも様子が変だ。テーブルも何もない。それどころか薄汚れた布団がそこいらに散らかっていて、ジャージを着たおっさんが寝転がっていたりする。なんだ、倒産してルンペンの巣になったのかと分ったとき、オレは奥に何かの塊があるのに気がついた。

布団をまたいで行っても、おっさんは文句も言わずゴロゴロして何か食っている。塊の正体が分った。

ファミリールレストランの店長だ。前にも何度か来ているから顔は知っている。それが今、手足をなくして転がっている。ショックで頭もおかしくなったみたいで目もうつろだ。どこを見ているのか分らない。

何があつたのか知らないが、あそこでゴロゴロしているおっさんがやつたに違いないとオレは直感した。こんな店では注文できないので外へ出るとまぶしかった。車を出そうとバックするついでに建物の方に目をやると、外見はやっぱ立派なファミリールレストランだ。紛らわしい。

オレはとにかく何か食いたい。ところが、行き先に変なものが見えてきた。

交差点で車イスの障害者が撥ねられたのだ。それが、みんなそ知らぬ顔で次々に轢いていくものだから、大量のミンチみたいなのがアスファルトに塗りとくられたようになってる。気持ち悪いから、オレも早いところ左折して遠ざかりたかった。なのに、ちょうど信号にひっかかって、最前列で一分ほどじっと見ていなければならなかった。

それでも飯を食うぞという決心は動かない。幸い食堂街に通りがかった。

オレは車を止めてどこへ入ろうかと店を物色する。

安そうな店を見つけた。のれんをわけて入ろうとしたとき、足もとにキラッと光るものがあることにオレは気がついた。

それはベニスそっくりの形をしたビンだった。なんでこんなものが落ちているのか妙に思ったが、この店に出入りする人は一様に見て通ったはずだ。

何だかビンを他人に見られるのは自分のベニスを見られるようでオレは恥ずかしくなってきた。ここに入ったら、中の先客に笑われる。

仕方がない。店に入るのはあきらめて、オレは近くのコンビニでなにを買いおうと考えた。

入ると、ハゲオヤジの店長が頬杖をついて坐っている。それを横から店員の中年女が、醬油をハゲ頭にツートたらしめていた。なににオヤジは怒りもしない。にやにやしながら「やめろよな」と言っているだけだ。なんだこいつらはと、オレはおにぎりを無愛想にさし出した。

ところが意外に感じのいい接客態度だった。オレがいることに今まで気がつかなかっただけなのだ。女のほうもあわてて取り繕おうとして「さっきのことなんだけど、山伏がね」と、小声で醬油をかけたことのいいわけをしている。オヤジはタオルで頭を拭い、お釣りを数えながらウンウンと

返事する。オレは、この二人が微笑ましいからと、やっと食うことができる安心で嬉しくなってきた。

で、橋の上で立ち止まって袋からおにぎりを取り出した。どうやって封を切るのかなと迷っていると、お巡りが来て「立ち食いはいけない」と言う。仕方がないから「知りませんでした」と謝った。橋の下ならいいというので、オレはコンクリートの階段を降りた。

こんなところで食うなんてルンペンみたいだと思ったけれど、空きっ腹には堪えられない。いよいよ食うぞというとき、雨風で色褪せたヌード雑誌やら犬のフンなんかが固まったところに、お菓子のきれいなカンが落ちているのが見えた。

ちよつと怪しいと思ったけど、あんまりきれいなのでオレは開けてみた。それが失敗だった。開けたとたん凄いい臭いだ。

誰かが猫を飼っていて、それが死んだのでカンに入れて棄てたものだ。カンの中から土に帰ることもできず、中で腐れ果てている。

オレはまた食欲をなくし、しかし同時にいい考えを思いついた。おにぎりを持って、最初のファミリーストランに戻ればいいのだ。

オレは倒産したファミリーストランに帰ってきて、寒いから布団にくるまった。もう誰にも邪魔させない。邪魔するやつがいたらただではおかない。

ところが、本当に邪魔しに来たのがいた。

とうとう頭に来たオレはそいつの腕をつかんだ。するとポロッと取れた。脚をけたぐると、おもしろいようにぶっ飛んでいく。何だ人形だったのかと、オレは残った手足も外して遊んだ。するとダルマが一個できあがった。